

夕陽會報



昭和30年9月当時の函館十字街
高井信行氏撮影（昭和30年卒）

第181号

◇ 巻頭言 ◇

北海道教育大学の
再編と函館校(Ⅲ)

会長 安島 進

北海道教育大学（村山紀昭学長）は、去る九月一二日、大学キャンパス再編の基本方針を発表した。本年五月に示された北海道教育大学将来構想基本方針（案）（夕陽会報第一八〇号参照）について、各分校での協議結果を踏まえ、八月下旬開催の代議委員会では基本方針（案）どおりの決定を見たものであり、基本方針に基く構想の具体化を図ることになった。具体化のための検討体制として、教員養成系、教養系、芸術・スポーツ系、大学院、学部構想の五つの分野に基づくワーキンググループを一月中旬に立ち上げ、明年三月末には具体的な実施計画の中間報告がなされる予定で作業を進めることとなった。

このたびの基本方針の第一に上げられる最も重要なものとして、各分校ごとの小規模な教員養成の分散と新課程の併存から「明確な機能分担システム」をもったキャンパス体制に転換することが上げられている。大学改革と教員養成改革の必要性が、五分校体制による現状維持を許さないばかりでなく、法人化後に於ける厳しい評価に耐え得る再編の必要に迫られていることも背景となっている。

さらにキャンパス再編の基本視点の第一として「現代的課題に因應する教員養成教育の抜本的改革と新課程の充実発展により北海道内唯一の総合的教員養成・研修機関、及び学際的・文化的な分野に関して特色を有する高等教育機関として本学の発展を期することを目的とする。」ことが上げられ、単科教育大学の枠組み

を越えた複数学部（学類）を有する大学への構想化を進めることになった。

五分校各キャンパスは基本方針（案）のとおり決定を見、函館校は芸術系及びスポーツ系を除く新課程の集約・再編による教養系の学部として、国際教養情報文化、生涯学習等の分野を通じ、広く人材の養成に関わることになった。

加えて初等教育教員免許の取得も含めた、開放制の教員養成機能も併せ保持することになった。母校の教員養成課程の存続を強く願ってきた我々にとって、改善の策ともいえるものであるが、幅広い教養や専門性を身につけるとともに、自らの強い意志と努力による教師の誕生に期待したい。なお、附属四校園の存続、大学院機能の充実が図られることになっており、特に道南の教育界、及び関係者にとって引き続き研修と養成の拠点施設でもあることを願うものである。

二〇〇四年（平成一六年）、母校は創立九〇周年を迎える。そして大学法人化元年として、新たな経営形態の実施年となる。再編後のキャンパス構想と教育課程の実施、学生募集は一八年度から想定されている。母校は全学の発展構想による教養系学部（学類）としての位置付けのもとに、新たな役割を担うことになり、函館の持てる歴史的・文化的な立地環境を生かすとともに、地域との相互連携など、より豊かな教育環境、魅力ある大学づくりに期待するとともに、夕陽会としても母校と願いを共有し、新生函館校の実現を支援してまいりたい。

夕陽會報

今年度の道内幹事長会議は、八月二十日(土)、午後一時より函館にて開催された。夕陽讃歌の大合唱の後、安島会長「各支部活動報告を受け、本部事務を意義あるものとしていきたい」とのあいさつで始まった。

野田義成・中瀬裕義両副会長が議長を務め、報告・協議事項から議事が進められた。はじめに、藤川幹事長から総会の概要が報告され、大坂函館校主事の講話の要旨へと順次話された。次に、今年度の運営方針の説明となり、特に「女性会員・若手会員の運営への参画」、さらに、函館校に関する情報や函館に関する情報の発信に重点をおき、夕陽会の目標の再確認とその達成に向けた活動への期待が述べられた。

次いで、安島会長から、母校関係について話された。これに関しては前号の巻頭言と主事講話要旨、今号の巻頭言を熟読していただきたく、ここでは省略する。

協議事項では、「組織強化と運営」について、実務レベルの意見交換と若い会員や女性会員の参画の工夫を中心に報告・協議された。各支部からは、活動の工夫として、支部長杯のゴルフコンペ実施、寮歌各番の出だしをタイトルにした支部会報の発行、研修する夕陽・若手実践交流会の実施、五年間で五人の管理職の数値目標設定など、各支部の実態に応じた活動が報告された。共通の悩みとして語られたのは現職会員の減少であり、若手会員をしっかりと取り込んでいく取り組み

の必要性が第一であった。課題として、今後ますます増加していく教職外会員の組織化について議論された。幹事長からは、各支部の要望に応えるべく本部も努力していくことが話された。

続いて、各部より取り組み状況報告と各種依頼が話された。来年度の本部総会は、平成十六年六月十九日に函館開催予定、会費納入に一層の努力をいただきたいとの依頼、会員異動について正確な情報提供の依頼、夕陽会報の記事材料への協力依頼。研修部からは、研究会、研究会、個人研究等の助成について積極的な活用と今年度の教育講演会への参加要請があった。

最後に安島会長より、お礼と今後の夕陽会の発展を願うことばをもって、この会を終えた。

本州支部を対象とする幹事長会議が、十月十八日(土)、青森市にて開催された。参加支部は、青森津軽青森西北五青森南部、秋田、岩手、東京の六支部で、大学再編・母校再編の報告のため、支部長の出席も合わせて行われた。

安島会長の支部長参加の意義に触れた開会挨拶に引き続き、藤川幹事長より、平成十五年度本部総会についての報告がなされ、今年度の活動として一般職会員等の組織強化、女性会員及び若手会員の積極的な参画、夕陽会ホームページの充実などが説明された。

続いて安島会長より、大学再編・母校再編の状況が説明された。冒頭、北海道教育大学将来構想基本方針の中から函館校に関する事項についての説明があり、新課程が集約されるが、教養系新課程の集約・再編に対応した大学院の設置を目指すこと。さらには、教員養成機能を残し免許状の取得が可能になること。また、課程より一段上の組織の学部構想を考慮することになるなどの報告がなされた。教員養成が中心でない事は同窓会として、悶々たるものがあるが、母校の一層の発展を願って共に歩む姿勢でいる事が報告された。

続いて、本州各支部より組織強化や各種取り組み状況が報告され、意見交換がなされた。各支部からは、会員意識の向上や支部事業への積極的な参加の在り方など組織強化の課題が報告された。

また、様々な取り組みの工夫も紹介され、岩手支部では、各地区を巡回する方式で総会を行うなかで地域の掘り起こし

を行っている事例が報告された。岩手支部は来年の支部結成二十周年記念総会を函館の地で開催する計画が紹介された。さらに東京支部よりは、東京における人事考課制度などの紹介もあり、母校の建学精神を現代の課題に照らした取り組みの紹介がなされた。

懇親会では、今回参加の最長老である昭和十六年卒業の岩手支部長及川先生の力強い祝杯で始まり、青森県下三支部の若手会員も参加し、学生時代の思い出や教職で取り組んでいる実践に花を咲かせ、乾杯を青森南部永井支部長のご発声で和やかな会に幕を閉じた。

「三世代 夕陽と共に 語る秋」

(昭和48年卒 副幹事長 島津 彰記)

11	8	4	4	3	7・3	20	11・18	25	18	11	9	10・3	29	4	9・2	30	23	23	18	8・8	7・17									
渡島支部森支会総会に藤川幹事長が出席 (森)	渡島支部南茅部支会総会に藤川幹事長が出席 (川藤)	渡島支部松前支会総会に類家副幹事長が出席 (松前)	渡島支部長万部支会総会に土谷副幹事長が出席 (長万部)	渡島支部鹿部支会総会に藤川幹事長が出席 (鹿部)	渡島支部木古内支会総会に尾島副会長が出席 (木古内)	《支部総会・祝賀会・個展等》 渡島支部木古内支会総会に尾島副会長が出席 (木古内)	道教育長と五分校同窓会長との懇話会に安島会長が出席 (札幌)	平成15年度ウエブ委員会開催 (札幌)	道内支部長臨時会議開催・大坂分校主事講話 (札幌)	夕陽中央会議開催 (札幌)	函館校創立90周年実行委員会に安島会長、藤川幹事長が出席 (函館)	平成15年度第二回本部役員会開催・大坂分校主事講話 (函館)	北海道教育大学五分校同窓会長等会議に安島会長、藤川幹事長が出席 (釧路)	大学改革について大坂分校主事と安島会長、藤川幹事長が懇談 (函館)	明日の教育を考える研修会(31日) (函館)	母校創立90周年事業について大坂分校主事と藤川幹事長が懇談 (函館)	本部事務局専門部長・部員会議(委嘱状交付) (函館)	平成15年度道内支部幹事長会議 (函館)	安島会長が懇談 (函館)	夕陽會報第180号発行 (函館)	夕陽會報第180号発行 (函館)									
29	21	15	15	8	11・8	12	11	11	8	5	30	29	29	27	25	20	13	31	23	8	6	30	29	27	26	26	25	18	17	
岩手支部総会に藤川幹事長が出席 (一ノ関)	六陵会渡島函館連合会懇親会に藤川幹事長が出席 (函館)	養護別科同窓会に祝意 (函館)	北師教育文化振興会函館渡島支部懇親会に類家副幹事長が出席 (函館)	道央ブロック会議に安島会長、藤川幹事長が出席 (函館)	体育科研究室同窓会に尾島副会長が出席 (網走)	道東ブロック会議に安島会長、藤川幹事長が出席 (網走)	祝賀会に安島会長が出席 (函館)	函館美術館「詩歌と書の世界展」に安島会長が出席 (函館)	昭和40年卒同期会に祝意 (函館)	昭和38年卒同期会に祝意 (札幌)	昭和24年卒同期会に安島会長が出席 (札幌)	「北二師桐の会」同期会に祝意 (函館)	夕陽老壮会に安島会長出席 (函館)	指導主事等云学習会に安島会長、藤川幹事長が出席 (札幌)	鈴木大有(孝徳)氏昭和55年卒創立展東京都知事賞受賞祝賀会に安島会長が出席 (札幌)	昭和26年卒同期会に祝意 (札幌)	昭和19年卒同期会に祝意 (函館)	青陵会創立80周年記念式典に安島会長が出席 (旭川)	旭川校創立80周年記念式典に安島会長が出席 (函館)	鶴陵会渡島支部懇親会に尾島副会長が出席 (函館)	昭和39年卒同期会に安島会長が出席 (美瑛)	道北ブロック会議に安島会長が出席 (函館)	昭和30年卒同期会に祝意(定山溪) (函館)	昭和20年卒同期会に祝意(洞爺湖温泉) (函館)	昭和38年卒「淑女の会」に祝意 (函館)	昭和59年卒国語科同期会に祝意 (函館)	昭和46年卒同期会に祝意 (函館)	渡島支部支会長・幹事長会議に安島会長、藤川幹事長が出席 (函館)	渡島支部支会長・幹事長会議に渡島支部戸井支会総会に藤川幹事長が出席 (函館)	渡島支部恵山支会総会に藤川幹事長が出席 (恵山)

受賞(章)おめでとうございます

函館市大森町一四の五

28年I卒





「定点撮影」の試み

函館半世紀の変遷をみる

高井 信行

(昭和30年卒)

小学校一年生の時、わたしは旭川から函館に移り来て、山あり坂あり港あり、そして教会の尖塔があるエキゾチックな風景に魅せられた。昭和三十年、教職に就いてカメラを手にした時この風景を写真に納めようと市内百余箇所を定めて撮り始めた。

十年後に再度同じ箇所から撮影をして、幾つかの変化に気を引かれた。これらが今後どう変化するか、更に十年後にも撮影を試みたいと思った。また帯広市にしばらくの間住んで、函館の魅力を一層強く感じ、その変化を追ってみようと思っ

た。これを自分なりに「定点撮影」と名付けた。

本年で五十年、第六回目の撮影を終えて三冊のアルバムにまとめた。これを自分一人、ひっそりと納めておくだけでは物足りない気がした。写真を撮る技術は全くの素人で、構図、焦点、露出等まことにおそまつであり、しかも安物のカメラでは広く人様にお見せできる代物ではない。ただ、せめて小学校社会科の教材にでも活用してもらえればと考え、百余箇所の中から二十数箇所を選び、写真はA4版に伸ばして模造紙大の台紙にはっ

た資料を作った。

十一月の初め、市内のある小学校四年生にこの資料を説明する機会を頂いた。郷土の変化の様子やそこに至るまでの人々の苦勞や努力を理解し、先人の偉業に尊敬と感謝の気持ちを持って

もらうなど、学習の一助にすることができた。このような形で役立つことは望外の喜びであった。

函館五十年の変遷について二点の写真を紹介したい。紙数の関係で、



函館駅



函館市役所



初回(昭和三十年代)と現在(平成十五年)のものにとどめ中間は省略する。なお、夕陽会創立八十周年記念誌「八十年誌」にも幾つかの写真が載っているので併せて参照して頂きたい。

同期会だより

昭和二十九年北海道学芸大学函館分校
二類卒業同期会（二九の会）が秋もたけ
なわの九月二十九日午後六時から函館観
光ホテルで開催されました。

函館会場の際は母校の地でもあり、母
校や夕陽会の近況について知りたいとい
う要望もありますので、夕陽会会長さん
のご出席方をお願いしておりましたが折
あしく、既に予定が入っておられて残念
ながらお顔を拝見することはできません
でした。

「二九の会」はこれまで各地区ごとに
旧交を温める会を開いておりましたが、
平成四年から胆振地区が中心になり、卒
業同期全員に呼びかけて第一回目を洞爺
湖温泉を会場に開催されました。

以後、佐藤一雄氏（当時、伊達市教育
委員会教育長）を会長に、胆振地区、札
幌地区、函館地区の三地区を持ち回りで
毎年開催してきております。

今年「二九の会」が発足して十二回
目の同期会になります。卒業当時の同期
生は二二一名おりましたが、住所不明の
方が十三名、既に他界された方が三十八
名おりますので現会員は一七〇名となり
ます。現会員一七〇名に案内をしました
ところ道内は勿論でありますが秋田・東
京から参加され、お互い元気で再会でき

たことを喜び合い、二次会、三次会と時
間の経つのも忘れて、学生時代の姿にも
どり、呼び名で酒を酌み交わし、「生き
ている限りは青春だ」と歌っている間は我々
の青春は決してスクラップにはならない
ものと思えます。

このかけがえのないひとときは共通な
時間や空間を共有した「心の故郷」とし
ての青春時代の胸に満つ久遠の思いであ
り誠に感慨深いものがあります。

この度の同期会開催に当たっては現会
員一七〇名に案内状を送付しましたが残
念なことに予想していた人数を下回り、
三十七名の参加でした。

参加できない理由として、「体調が思
わしくない」「病後で療養中」「入院のた
め」「介護のため」「遠距離のため自信が
ない」などと健康上の理由が目立つ一方
で、「町内会行事への参加」「ボランティア
活動のため」「旅行中」とまだまだ元
気で活動している様子もうかがわれます。

私達同期会会員は学芸大学卒業五十年
には一人残らず古希を迎えることになり
ます。

厚生労働省の基準では「高齢従属人口」
つまり、「自ら生計を立てるほど稼げな
い老人」ということであり、当然高齢者

として認知されてはいるものの、照明の
進歩や老眼鏡、義歯、補聴器などの助け
で活動の場が拡がっていることは確かだ
す。

しかし、そうはいっても足腰は弱くな
り、動体視力は衰え、高齢化に従って肉
体的衰えは避けられません。運転中も安
全確認がおろそかになりがち、病院へ行っ
ても「年のせいですよ」とあしらわれ
るしまつです。

不老長寿は人類永遠の願いですが、現
代の医学と経済政策は人々を長寿にはし
ましたが、不老にするにはまだ成功して
はいません。

しかし、肉体は年を取ると衰えるほう
がよいかも知れません。残りの人生が短
くなるのに、肉体だけが不老なら世の中
への執念が募りすぎます。適老長寿こそ、
幸せといえるのでしょう。

老いのもう一つの現象は可能性の範囲
が狭まることです。年を取れば人生の過
去が増え、未来が減ります。七十歳を過
ぎれば人生のほぼ四分の三強は経過して
います。欧州行きの飛行機なら、北極圏
を越えてスカンディナ비아半島に入って
おり、これからの着陸地点がロンドンか
パリかフランクフルトかの選択はあつて
も、インドやオーストラリアに行くこと
はできません。到着地の「夢」を描くこ
とはできませんが、その範囲は限定され
てきます。

でも、この限られた範囲での「夢」は
持ち続けたいものです。

自分の過去を思い出してみると、若い
ころには夢とともに不安も多かったと思
います。高校の期末試験が心配だったし、
大学の入試も不安でした。また、就職の
職場選びにも迷ったし、就職してからは

朝の遅刻を心配したり、子どもたちへの
学習指導についても不安が多く、落ち着
かない日が何日も続きました。

若いということは、夢とともに不安も
多いことなのです。あとから思い出せば、
そんな不安は忘れ、若き日の夢だけがき
らびやかに現れるものなのです。

「若い」は夢を狭めますが不安も薄め
てくれます。ましてや人生航路が定まり、
行き先が限られるとなると迷いもなくなっ
てくるものです。

古希は心の定年といわれ、人生の分岐
点でもあります。自分自身の「いのちの
姿」を見つめる年代に入ったことになり
ます。

人は死に向けて年を取るといのが誰
にも共通の人生のテーマであります。そ
の他のテーマはそれぞれ人によって違い
はあっても死は平等にやってきます。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響き
あり」のことばのように「生まれたものは
必ず死に、作られたものはいつかは壊
れる」のがこの世の絶対的な事実であり
ましょう。

古希を過ぎるとあと残された時間はど
のくらいあるか知るよしもありませんが、
狭められた夢を追って、新しい目標に向っ
て挑戦していきたいものです。「人生は
神がくれた一枚の招待券である」（高見
順）ただ、有効期間の明示がないのは神
の深い配慮なのでしょう。

平成十六年は卒業五十年の節目の年に
当たります。私達はお互いが「二九の会」
の皆さんと邂逅（めぐり合い）したこと
で多くの真実にふれあえたことに感謝し、
人生の新しい門出を祝して、意気高らか
に集い合いたいものと思っております。

本会では、例年、会員の研修を目的に講演会等を開催して参りましたが、今年度も別掲のように「夕陽講演会」を開催することになりました。

今年度は、南茅部町教育委員会埋蔵文化財調査室長の阿部千春氏を講師にお迎えし、「縄文のころ」と題して遺跡の発掘の様子や成果等についてお話いただきます。

講師の阿部千春氏は、立正大学文学部史学科で考古学を専攻された後、北海道埋蔵文化センター勤務を経て、平成元年、南茅部町教育委員会に赴任されました。日本考古学協会の会員としてもご活躍で、

日時 平成十六年一月二十四日(土)
午後一時三十分

会場 函館ハーバービューホテル
(函館市若松町一四一〇)

演題 「縄文のころ」

講師 南茅部町教育委員会
埋蔵文化財調査室長
阿部 千春氏

*入場無料、多数ご参加ください

これまでいくつもの遺跡の発掘調査を手がけてこられ、埋蔵文化財に関する著書も多数執筆しておられます。

現在、史跡大船遺跡の保存整備などにご多忙な日々ですが、ご無理を申し上げて講師をお引き受けいただきました。

このたびの講演では、南茅部町の遺跡から出土した国内最大級の大きさで、中空に作られている「土偶」に関するお話をはじめ、埋蔵文化財が語りかけてくる当時の人々の生活や文化などについて、貴重なお話をいただけるものと期待しております。

「夕陽講演会」と銘打っておりますが、夕陽会員以外の方も大歓迎いたします。ご家族はじめ、知人、友人をお誘い合わせの上、多数ご来場いただければ幸いです。お待ちしております。

今年度の講演会開催に当たりましては、南茅部町教育委員会の石坂新一教育長はじめ関係の方々にご多大なるご配慮を賜りました。紙面を借りてお礼申し上げます。

この講演会に関して不明な点などがありましたら、次の研修部員にお問い合わせください。

《研修部員》

- 道幸 拓志 (上磯町立久根別小学校)
- 藤井 良江 (函館市立北昭和小学校)
- 石黒 一次 (函館市立石崎小学校)
- 小笠原章人 (教育大学附属養護学校)
- 武田 隆雄 (函館市立東小学校)

《その一……雑感》

記念館の整備に携わっている関係で、土・日曜日になると、「整備」とまではいなくても記念館に足を運ぶ機会が多くなってきました。鍵を開けて、まず一番先に行き、地元や道内はもちろんですが、本州からの大先輩のお名前を見つけると感慨もひとしおです。どんな思いで記念館に足を運ばれたのか、記念館でどんな時を過ごされたのかなど、大先輩が回顧にふけるさまを想像するだけでも、記念館にかかわっている者の一人として充実感・満足感を感じています。会員の皆様のたくさんのご来館もお待ちしております。

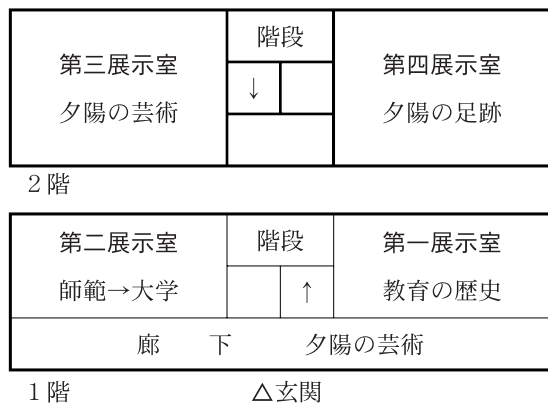
《その二……資料移管》

今まで長い間、大学の図書館で保管されていた北海道函館師範学校から北海道教育大学函館校に至るまでの大学の歴史や、夕陽同窓会に関する資料・文献、同窓会員の出版物などが夕陽記念館に移管されることになりました。一部を展示し、残りは書庫での保管となります。昔の教科書や資料・文献などがとてもよい状態で保存されていますが、貴重な資料ばかりなので取り扱いには気を使います。慎重に作業を進めています。

《その三……特別展示》

二階の第三展示室『夕陽の芸術』には多くの同窓会員の絵画・書・彫塑作品等が展示されています。中でも昭和四年卒、文化勲章受章者である故金子陽亭氏の書作品は数も多く、見ごたえがあります。先日、安島会長、高井記念館整備委員長が来館され、「金子陽亭コーナー」を設置してはどうかというご助言をいただきました。少し時間をいただいて構想をまとめ、作業を進めていきたいと考えています。

夕陽記念館の平面図





平成十六年度文化事業 「夕陽音楽会」に向けて

文化部長 大川 富美男

(昭和45年卒 函館市立西中学校)

夕陽会文化部は、ご承知のとおり①会員の文化活動に関する支援 ②文化事業(音楽会、美術展、書道展等)の企画、実施 ③その他、文化に関すること、を事業として行なっています。

その中でも、四年一サイクルの音楽会、美術展、書道展は、夕陽会の画期的な事業としてスタートしましたが、いまや私どもの標榜する「創造し行動する夕陽会」の具現の一環として大きな役割を担ってきております。

昨年七月には、「第七回夕陽美術展」(繪面和子実行委員長)が函館市芸術ホールギャラリーで開催され、多くの方のご来観を通して「自然との対話」「人との語り」の中から、更なる制作への飛躍を期したところであります。

また、本年六月には「第七回夕陽書道展」(澤田稔実行委員長)を盛会裡に終了することができました。会期中に夕陽会本部総会・大懇親会が開催されたこともあり、全国各地からお越しの多くの会員に文化事業を直接紹介する機会を得ました。今後の充実に向けて大きな励みとなりました。

さて、次年度は「第八回夕陽音楽会」を開催します。平成十七年一月～二月を予定しています。詳細につきましては、後日発行の「夕陽会報」でお知らせできると思いますが、ご了承ください。

この機会に文化事業の魁となりました「夕陽音楽会」の足跡を少しく辿り、次



土谷 敬

(昭和54年卒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校)

夕陽会の組織拡大、強化と活動の啓発等を図るために組織部の特別委員会として平成十一年十月に発足したインターネット委員会による約一年間の準備作業を経て、平成十二年十二月八日に立ち上げた夕陽会ホームページも四年を迎え、現在一万人を超えるアクセス数を数える状況にあります。

この間、夕陽会本部はもとより各支部、支会等の活動予定や状況などを掲載し、広く会員の皆様に情報を提供して参りました。しかし、委員の中心メンバーの広域異動のため、ここ最近の委員会機能が停滞しており、適時性のあるコンテンツの更新ができにくい状況にあり、会員の皆様にご迷惑やご不便をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

このようなことから、委員の補充とインターネット委員会の機能の向上を図るべく、去る十一月十八日に本年度第一回目のインターネット委員会を開催いたしました。

委員会では、藤川隆本部幹事長からの労いとインターネット委員会への期待を込めた挨拶の後、新委員長に七飯町立藤城小学校校長藤井壽夫氏を選出し、組織機能の向上や今後の活動計画について協議がなされました。

特に、情報の質の維持向上と安定的な提供を目指して情報収集機能と更新機能の充実を図るために新たに委員会内の役割を明確にし、委員長長の指示の下で機動

性のある活動ができるようにするとともに、年間計画の策定の下で計画的に活動を推進できるようにすることなどが話し合われました。

この委員会を受け、早急に更新作業を開始し、年明けには、新しい情報を皆様にお届けできるようにしたいと考えております。ぜひ、更新された夕陽会ホームページをご覧頂き、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

委員長	藤井壽夫(藤城小校長)	副委員長	土田信正(西小教諭)	委員	佐郷谷滋(附属小教諭)	秋山範光(附属中教諭)	和田悟(附属養教諭)	佐藤雅博(湯川中教諭)	阿倍陽喜(銭亀沢中教諭)	坂田一俊(北中教諭)
-----	-------------	------	------------	----	-------------	-------------	------------	-------------	--------------	------------

夕陽会ホームページアドレス
<http://www.sekiyou.org/>

夕陽會報

昨年、夕陽會八戸大会のために作った「八戸紹介」を再利用させていただく。

○赤松、黒松が自生。(自然状態では赤松、黒松は本州以南の分布と言う)。

○モウソウチクは、人為的な植生。サルスベリ、キョウチクトウが庭で育つ。

○冬場の甘物として、農家は家の周りに「柿」を植えていた。陽光澄み切った冬景色のなかに柿の実がたくさんなっているのを見て、私は「内地」を感じた。

○南部一帯では、酢の物やみそ汁にして、菊を食べる。品種は阿房菊。

○「せんべい汁」がある。サバ缶詰でだしをとった汁に専用のせんべいを入れる。冬場しかつくらない。

○昔は、そばの産地であった。(やませで米があまりとれなかつたらしい。)切り残った半端な生地を、汁につけて食べた「そばかけ」料理がある。

○イカの内臓の呼び方は、津軽では「ゴロ」、南部では「」。ウニの道南での呼称「ガンゼ」「ノナ」は通用しない。ヒラメの「テックイ」もだめ。

○道南の「マキリ(小刀)」、「チャランケ(無分別)」、「ナマラ(大変の意の副詞)」もこちらでは分らない。

○漁獲量で多いのは、サバ、サンマ、イワシ、イカ。サバとイワシは産地ではあるが、漁獲量の変動が激しい。時期によっては波模様のどぎついノルウェー産サバが店に並ぶ。

○冬場になると、ホッケのすり身のピニール袋詰めが売られているが、製造元は函館の業者。「イカめし」も同様。

○アイヌ語由来と思われる地名がけつこがある。八戸駅のあたりは、旧名「シリウチ」。「尻内」と書いたが、語感が悪いので「一番町」に改称した。「マベチ(馬淵)川」、「ドウブツ(道仏)」、「トウフツの訛り」。「シプタミ(洪民)」、「コロナイ(頃内)」等もある。

○キジが多い。人家近くにもしょっちゅう出没する。(本来、北海道にはキジはいないが、戦時中、肉をとるため日高地方に、高麗キジを移入したと言う。)下北半島に日本サルがいる。桃太郎の話は、内地ではじめて成り立つ。

○江戸時代までは、イノシシがたくさんいた。作物を根ごと食い荒らし、凶作の原因をつくった。そのなかで、安藤昌益が「自然真営道」の思想を深めていったと言う。狂犬病が広がり明治かその頃に全滅してしまったという。今は、関東あたりまで南下しないといないらしい。

○「江差の繁次郎」に似た話やルートとなる話をこちらで見ることがない。よそ者ばかりの集まりで、大ぼらがまかり通った昔の北海道を具現化したキャラクターではないか。

○私事ですが、○四年三月思潮社から松越文雄の名で詩集『ひと休みの空』出版。函教大の小名・安東元先生、ベネッセ高階玲治先生と同じ「表現」の一員です。

とりわけ本年八月代議員会で将来計画基本方針を議決したことは大きな画期をなすものであります。函館校が将来教員養成機能を組み込んだ新たな教育組織として新学部を構想することとなりましたことをここに改めてご報告いたします。

また、平成十六年度四月から国立大学が法人へと移行することとなりまして、この中で六カ年の目標達成のための事業計画を具体的に遂行することとなります。特に学生の教育と研究、それと同時にこれまで以上に社会的な貢献が求められる時代となりました。

「今までの教育大と変わったのですね」と評価される時代が必ずや到来するものと確信しています。

さてそのような中で、平成十六年度に函館校は大正三年の函館師範学校の創立以来、開設九十周年を迎えること

となります。このため、現在函館校の教職員で函館校開校九十周年記念事業準備委員会を立ち上げ、事業内容を検討しております。記念事業の実施は、八十周年事業を参考にし、安島会長にもお入りいただいた実務委員会でもお入りいただくとしております。

現時点での予定では、平成十六年六月十二日(土曜日)に函館ロイヤルホテルにおいて記念式典を挙げる予定で計画を進めております。この時期は、夕陽會の総会・大懇親会の時期に近接しており大変ご迷惑をおかけいたしますが、この日程で実施することといたしました。日程の設定は函館校の事情によるものと賢察の上、多くの同窓会の諸先輩にご来場いただけると幸いです。

函館校の大学教官サイドでは、式典だけで終わることなく、この年から法人化となり大学の姿が大きく変わることとを広くアピールしようと話し合っております。平成十六年度は年間を通して各種の記念事業に取り組みたいと考えております。その全体像が決まりましたら、改めて夕陽會会員の皆様にはご案内いたします。





恵まれて本部の傍にいる

渡島支部長 天野 哲 征

(昭和41年卒 上磯町立谷川小学校)

七百を数える会員数を誇るのが、我が支部である。本部はもとより、他支部の期待に沿う活動とすべく、幾つかの努力事項がある。

それはこれまでの支部長が理想と夢をつないできた成果だろうと自負するところである。

桜満開の頃に行われる「渡島支部総会・大懇親会」は新会員歓迎会は年々盛大になり、昨年は二百五十余の大盛況となっている。若い世代の同窓意識の希薄化！などと言わせないパワーが溢れる。

近年、教師の熱意や使命感が欠けるなどと言われ、非常に腹の立つ思いがなきにしもあらずだが、夕陽会の集いを見る限りでは、当てはまらない。

それほど、老若男女世代を越えての教師の魂の躍動は、期せずして、諸氏の求めるところとなつていふように思う。

とくに今年度から「新会員歓迎会」と副題をつけた懇親会は、若い先生達つぶやきからヒントを得たものである。

それは「皆が集まると、同期会になるよね」という女性会員の声であった。なるほどと思つたが、これは夕陽八十年年の大懇親会の時のテーブルが卒業年度毎に工夫されていたことに端を発するのだろうか。大事なことは、授業中の子ども

や光を感じる感性が大切なだろうと勉強させられたところである。

「支会長・幹事長会議」は七月と二月に行われ、各支会の活動状況が交流される。



七月は会費の納入状況などが話題の一つであるが、各町村での会員の活躍、特に他管からの転入会員は南風を感じるところに赴任できたが、家族の健康状態や地域との交流等がスムーズだろうかなどが話題になる。

当然、今は金の卵の新卒会員の奮闘ぶり、学校ばかりでなく、時には地域の

活性化になつていけると聞くと、やっぱり我が夕陽、我が後輩とひとり頷くのである。それほど、本部の傍にいても、少子化に伴う現象は、若手の職場の確保には苦勞するものである。

また、各町村では独自に「総会・懇親会」を行つていふ。どの総会・懇親会にも各支会から、本部に安島会長のお出ましを願つていふ。多忙を極める本部の動きなので、本部副会長・本部幹事長等にも対応していただき、各支会本部情報が出前される機会となる。

特に、大学の改組・再編問題は一応の方向が決定されたが、新聞情報だけでは正確でないところを補つてあまりある情報をいた、だけ。

一つ確かになつたことは、教員養成課程がなくなつたことである。

私はこれを機会に大坂治分校主事先生の語ではないが、新しい教育大学を創る良い機会、絶好の機会が来たと考え、産みの苦しみにいることを大切にしたいものだと思ふ。

他の大学に比べれば、数の上では少数派ではあるが、少数精鋭で、身軽さがあるからこそその集団となつて、地域の活性化につなげていきたいと思ふ。

二月には「勇退者激励感謝の会」が開催される。勇退者を囲む会であるが、昨今嬉しいのは、渡島が一丸となつて送つてくれることである。

勇退者に「夕陽の会が終われば、いよいよ終わりだと思ふんだよね。」と言われれば、夕陽若人の感謝の気持ちは更に盛り上がる。

元気で、先頭に立つて活躍していた時は気づかないが、多くの人達のお陰で教職を全うできる幸せは、この会が盛大であるのを見ると、してやったり我が夕陽ではないか。

少子化の影響で、若い熱気溢れる会員の奉職が渡島だけでなく、道内外でも厳しいのが大きな課題である。

しかし、教育・人づくりからそれぞれの町の活性化の一端を担つてきた自負はおよそ夕陽人に共通だろうと思ふ。



今、世の中は市町村合併と未曾有の緊縮財政下にある。ある意味では、教育こそが、人づくりこそが国家安泰を成すと言われたことを思い出す。

その意味で、教育の夕陽は不滅。私たち渡島支部は本部のお膝元などと戯言を言う時代は終焉した。強く生きる生き方を、共に創り、共に学ぼうではないか。

支部だより

研究室だより

〈研究室の誕生〉
函館師範学校、といつても、昨今の卒業生の方には、どんな学校で、それが自分たちの母校である「北海道教育大学函館校」とどんな関係になるのかとの思いに捉われると思われまふ。

教育制度が時代の変遷にともなつて、フォルムを変えていったことと、連続性を実感させる建物自体が完全に解体したこと、田園情緒豊かなりし環境が、いつしか都市化の波の中にスッポリと納まつてしまい、回想するにも手がかりとなるものは、同窓会館となつて旧校舎の正面を残すだけとなると、内面的に心を伝える以外に―それも時間をかけ、パーソナルに―連続を維持させることは至難の業でしょう。旧帝国大学というのは、まさに国家の柱となる人材育成の国家的期待の存在でありましたから、煉瓦づくりの、格調高い重厚な建築様式が普通でしたが、専門学校は木造を主体にしたものがほとんどでした。

少価値だつたと思われまふ。中学校や女学校は、頭脳と経済力に裏付けられたものが学べた教育機関でした。頭脳だけはある、という少年、少女は、小学校卒業後高等科という、二年制の学校で学び、就職する大半の友とは別に、学費のかからない高等教育機関へすすめたのですが、その対象の一つに師範学校があつたというわけですが。こんな時は師範学校出の正規教員（訓導）は、自分の出身校に生徒を送り込みたくて熱心な勧誘をしたのと、時代的に、教師に対しての社会の尊敬の度合いは今とはまったく異なつていたと懐古します。師範教育の弊害も随分言われていますが、教職のもつ使命感には熱い思いが普遍的にあつたことは認めていいことだと思つています。師範学校の教官自体が、かつて師範学校に学び、高等師範学校や大学の学部に進学したのちに母校の教壇に立つというケースはかなり多かつたと認識しております。

次第でした。
（大きな針に掛からぬ雑魚）
研究室に所属することになるのは、食糧難から完全に解放されたS28年以降で先輩には、見るからに哲学者らしき風貌を既に漂わせていた細間先輩が一人おられたのでしたが、とにかく大学の哲学研究室がスタートした一期生で、何故か後輩との接触が全くないままに卒業されましたが、卒論にはカントを選んだところから推測すると、ベルリン先生のご期待がかなり濃厚だつたのではと察します。私は「デイダケー（教会の聖職制度）の発達」で卒論の真似事をしようと、不埒にも考えたことで、指導教官は秦慎二先生となりましてが、私一人が最上級生ということになり、「研究室をトップで出た」と、のちのち大口を叩くことになつたのは、事実を些かも偽つてはいないのであります。しかし、現実的に事実を直視すれば、「ビリで研究室を追い出された」というのが正確な表現となりましよう。幸いに一年下に、一歳年上の植村耕三さん（故人）などの秀才がおりましたので、研究室の水準の名譽は保たれたのでした。騒然としたこの時代は、まさにカオスそのものでしたが、日本の哲学会をリードしていたのは、京都学派の田中美知太郎先生で、その観点から国家像を眺め、歴史を読み、判断するということはどういうことか、などが熱つぽく語られ、時代の動きに対して、思想家の責任ということをたたき込まれたのは幸いでした。ギリシャ語の演習では、植村さんと私の二人で、秦先生を独占することになったのですが、二人で半分づつ訳す約束をし、当日突然相棒が休んだりすると、至近距離から目標に槍を突き刺すように、プスプスと血祭りにあげられたものです。語尾変化の演習で、若者（GENIUS）がネアーニアス↓ネアーニウ↓ネアーニアー

↓ネアーニアンなどとやつていううちに、こんがらかつてきて、ネアーニアの連続と相成り、「何をネアーニアしているか」とタツプリとしごかれる次第でした。勉強は、やり方だけ学んで、あとはじつくりマイペースで独学すればいいのだと口実をつくつて、試験までもほっぽりだして、まったくもって好き勝手な時を享受したのでした。「グノーシスセウ（汝自らを知れ）」、「サベレアウデ（知を求めに躊躇う勿れ）」などの箴言とともに、ビリから一番の二期生は、優秀な後輩にバトンをタッチしたのですが、気宇壮大に、絶対の座標軸を頼りに、堂々と生きていくことを叩き込まれたのは、学恩の全てと、母校に頭をたれるのみです。伊藤先生や秦先生の釣針針は、もつともつと大きな獲物を対象としておられたのでありましようが、小生のような雑魚は釣られたいと願つても、釣り針自体が大きすぎて口からはばけてしまうケースもあるものです。プラトンが伝えるソクラテスの言葉にある「生きることが大切なのではなく、善く生きることが大切だ」は、人間としての生き方を示すものとして膾炙しています。しかし、古稀を過ぎた者の生活体験としては、善く生きるということは、身体も脳細胞も健全で、理性の働きに何の障害もない者だけにしか当てはまらないような疑問が払拭できないのです。よしんば、理性の活動が停止状態にあつたとしても、人間の尊厳には何人といえども、優劣、存在意義などを口にすることは慎むべきだと考える時、別の次元、つまり宗教の世界以外には確実な意味合い、回答を示すものがないのではないかと、の絶壁に立たされることとなりましよう。研究室出身の同窓の高齢化とともに、次回の例会の格好のテーマとなりましよう。

函館市立弥生小学校の藤川校長先生から「夕陽會報」の原稿を書いて欲しい旨の電話をいただいた。「社会に活躍する同窓」というコーナーの原稿とのこと。

私は、現在勸函館市文化・スポーツ振興財団に勤めているが、基本的には現職の地方公務員であり、生計を得るための仕事であつて、とても「社会に活躍する同窓」というような存在ではない。その意味から、お断りしようとも考えたが、昨年四月に派遣されて以来、多くの同窓の先輩のお世話になつてきたこと、また財団の事業にとつて、北海道教育大学函館校の諸先生のご指導とご協力は欠かすことができないこと―等々、この紙面を借りてお礼ができると思つた。

併せて、これを機会に財団の事業内容や管理する施設について、理解していただく絶好の場にもなると思い、申し出を受入れることとした。したがつて、これまでこの項で紹介された方々の御活躍のあり様と、私の文章とはかなりの異同がある点をお許し願いたい。

私共の文化・スポーツ振興財団は、平成元年二月に函館市が百%出資して設立された。平均寿命の伸びや労働時間の短縮などによる余暇時間の増大、社会経済環境の変化に伴い、市民の文化・芸術

スポーツに対する要望も多様化、高度化する中で、的確で柔軟に、機動的にサービスを提供するためには、もはや行政の管理運営では十分に応えきれない―ということから、市の施設の管理運営を担う公益法人として設立された。

同年四月から、市民会館、市民体育館、市民プール、旧函館区公会堂を受託し、今年四月の青函連絡船記念摩周丸を含め現在の受託施設は十四施設であり、財団が設置した市民スケート場を含めると十五施設を管理運営している。施設の性格で分類すれば、次の四つに分けられる。

〈文化・芸術施設〉
市民会館、芸術ホール
〈ミュージアム・観覧施設〉
旧函館区公会堂、北洋資料館、北方民族資料館、文学館、青函連絡船記念館摩周丸

〈生涯学習活動施設〉
青年センター、亀田青少年会館
〈スポーツ施設〉
市民体育館、市民プール、市民スケート場、千代台公園スポーツ施設（野球場、陸上競技場、庭球場）

以上の施設の委託管理にあわせ、それぞれの施設の特長に合った財団独自の自主事業と各活動団体との共催事業を展開

しており、実に多種、多彩な内容で、平成十四年度の実施事業数でいえば、合計百五十を超える。その総てを紹介することはできないが、私共財団が展開している事業の種別とその考え方、具体的事業の主なものを十四年度実施事業を中心に紹介してみたい。

まず、文化・芸術であるが、市民会館芸術ホールを会場に「鑑賞型事業」を行っている。これは質の高いアーティストや楽団等を招き、市民や子ども達に生の舞台を楽しんでもらおうというもので、生活の中の潤いという意味もある。毎年の企画の中には、学校鑑賞に適したものを加えることにしている。十四年度は吉野直子さんのハーブ、田部京子さんのピアノ、徳永二男さんのヴァイオリンのリアルタルシリーズやワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団の演奏会、諏訪内晶子ヴァイオリンリサイタル、それに葉加瀬太郎コンサートなど、市民の皆さんに楽しんでいただいた。

次に「育成学習型事業」である。これは毎年参加者を募集し、一定期間の練習の後その成果を発表するもので、いわば「教室」のようなもの。芸術ホールでは舞台塾演劇教室、弦楽アンサンブル、市民会館では、和太鼓子ども教室、ジュニアドリムオーケストラがある。年々レベルがアップしており、発表会には是非参加いただき、励ましていただきたい興味があれば応募して欲しいと思う。

次に「参加創造型事業」であるが、文化団体協議会や各団体と実行委員会をつくり実施している。市内の芸術・文化活動のレベルの高さを示すもので、昨年は恒例の市民文化祭「華麗錦秋の夕べ」、市民オペラ「ドン・ジョバンニ」、「初春

巴港賑」のほか、市内の演劇関係者総参加による創作劇「炎の如く―箱館戦争と高松凌雲」を行った。多くの市民の方に喜んでもらえるよう、今後ともコーディネートとして、他の分野を含め、支援して行きたいと思つている。

観覧施設は、展示物を見学してもらうだけではなく、それぞれの施設の特長に合わせた事業も行っている。北方民族資料館では、アイヌ紋様の刺しゅう、木彫教室やムツクリの製作、演奏体験など、文学館では、市民文学講座や文学の夕べ、啄木かるた大会など。特に子ども達の体験を通して理解を深めるよう努力しているところである。今年から市内の子ども達は、土曜日の入館が無料となった。郷土の歴史や文化を知ってもらうためにも、一度は訪れて欲しいと思う。そのためにも、指導をする先生方には、是非足を運んでもらいたい。

スポーツ振興事業については、各競技種目の競技力向上や選手の育成事業は、各競技団体や体育協会が主として行うことになるため、財団が行うのは、初心者教室や健康づくりのための各教室、平成十四年度でいえば、体育館で十二教室を前期と後期に、プールでは七教室十三コースを延七十一回開催している。

その他、ニュースポーツの普及のため大会の開催のほか、プロ野球公式戦の誘致開催など、その時々々の市民の皆さんの要望に添えて取り組んでいる。

これら多くの事業は、文化・芸術であれ、スポーツであれ、それぞれの分野での指導者の皆さんのお陰であり、これらには、多くの先輩や同窓の皆さんがおられる。改めて、財団事業の協力で感謝申し上げます。今後も宜しく願ひします。

前納会費納入会員名簿追加分

(平成十五年十一月三十日現在)

菅野今朝吉	函館	昭40	吉田秀悦	函館	昭40	佐藤睦子	札幌	昭61
太田好紀	函館	昭40	三田俊昭	函館	昭40	野呂幸司	札幌	昭39
村山昭二	函館	昭39	尾関俊介	函館	昭39	高橋定雄	札幌	昭39
中村泰雄	函館	昭38	岡本茂子	函館	昭39	梶田克宏	札幌	昭40
永田稔	函館	昭34	西田清和	函館	昭43	山谷礼司	札幌	昭40
安本文康	函館	昭40	川岸巧	函館	昭40	平石秀昭	函館	昭41
松坂多加子	茨城	昭40	古旗英捷	函館	昭40	齋藤ヒデ子	函館	昭34
荒井浩一	胆振	昭40	絹野重治	函館	昭40	佐々木精一	函館	昭41
高森和子	東京	昭41	阿部克彦	函館	昭40	阿部克彦	函館	昭40

夕陽会員訃報

(平成十五年十二月一日現在)

松村 頼夫氏	昭9 (一部)	15・3・2	石神 禎一氏	昭35 (一類)	15・7・24	原 篤次氏	昭20 (二師)	15・9・22
江別市元町5の12		千鶴子氏	函館市桔梗1の24の7		芳信氏	札幌市東区北39条東16の3の6		瑠璃子氏
菅原 富夫氏	昭22 (二師)	15・5・3	福原 龍雄氏	昭23 (二師)	15・7・29	佐藤 秀雄氏	昭14 (一部)	15・9・25
苫小牧市日吉町4の27の8		嘉子氏	中川郡幕別町緑町10の35		萌志子氏	札幌市東区15条東13の1の6		みつる氏
杉本 晃一氏	昭17 (二部)	15・6・6	福井 弘三氏	昭13 (二部)	15・8・5	鈴木 正敏氏	昭20 (二師)	15・10・8
函館市本町20の17		光子氏	函館市五稜郭町42の8		洋氏	函館市桔梗町52の35		和氏
吉田 豊美氏	昭28 (二部)	15・6・30	瀬戸 英範氏	昭23 (二師)	15・8・17	佐藤 弘氏	昭24 (二師)	15・10・31
函館市本通3の13の32		亨氏	札幌市東区東苗穂4の1の2の3		秀美氏	東京都文京区春日1の6の1の707		文子氏
小岩 徳男氏	昭29 (室養)	15・7・2	田中 武桜氏	昭4 (二部)	15・9・11	平塚 重之氏	昭35 (一類)	15・11・3
苫小牧市日新町6の5の5		和子氏	札幌市西区西野6の6の8の6		眞澄氏	函館市川原町4の9		まり子氏
土門 厚氏	昭8 (二部)	15・7・14	数馬田友康氏	昭30 (二類)	15・9・11	千葉 秀子氏	昭25 (二師)	15・11・9
函館市本通1の42の11		喜代子氏	函館市本通1の19の41			函館市駒場町9の2		健治氏
細川 清次氏	昭16 (一部)	15・7・14	尾野政四郎氏	昭4 (一部)	15・9・13	長谷部 実氏	昭12 (二部)	ヨシ氏
小樽市花園町4の16の3		光恵氏	函館市旭岡町79の1			埼玉県鴻巣市松原2の3の20		
古谷 勤氏	昭22 (二師)	15・7・16	加藤 精二氏	昭6 (一部)	15・9・18	寺西 芳子氏	昭38 (一類)	15・11・24
札幌市西区西野2条9の3の10		千恵子氏	函館市本通1丁目48の26		キミ氏	札幌市東区北23条東3の3の7		宣雄氏
岩館 長一氏	昭35 (一類)	15・7・28	齋藤 せい氏	昭26 (二師)	15・9・22			
函館市東山2の38の6		悦子氏	登別市片倉町2の4の20		五郎氏			



編集後記

◆会報百七十七号表紙写真で紹介しました、ペリー提督の像を制作された同窓の小寺真知子氏(昭和50年卒)が、この度、土方歳三の像を完成させました。言わずと知れた新撰組副長で、函館で最期を遂げた幕末を彩る人物です。函館戦争ゆかりの地、五稜郭公園にある五稜郭タワーの所でその勇姿を見せています。来年のNHK大河ドラマは新撰組とか、大森浜にある土方・啄木記念館同様、多くの方々の感興を呼ぶものと思います。

◆表紙写真は一九五五年九月の函館十字街を撮影したものです。同窓高井信行氏(昭和30年卒)の定点写真の中から選ばせていただきました。画面中央には、懐かしい旧丸井今井デパートと路面電車、上空に張り巡らされた電車の架線と函館山にはまだテレビアンテナが見えませんが、駄菓子の「三ツ源」には桃屋の看板が見え、時代の移ろいを感じます。

◆次号依頼…次回、「支部だより」は、釧路支部と青森西北五支部の予定です。準備をお願いいたします。

◆お願い…次号では、各支部会報や同期会報の特集を組む予定です。バックナンバーがありましたら情宣部までお届けくださるようお願いいたします。

(情宣部長 藤川 潔 記 昭45年卒)